『ふぇらちお』とは如何様にして行なえばよいものなのだ。」
「はい？」
幸村の質問に間髪入れず佐助は聞き返してしまった。
佐助がその単語が分からずに聞き返したわけではない。
幸村からその言葉が出てくることが理解できず思わず聞き返してしまったのだ。
佐助と幸村の間を蒸し暑い風が通り過ぎた。
外はまだ真夏の日差しでギラギラとした光を蓄え、その熱を帯びた風が勢いよく教室の中に流れ込んできた。
それでも、佐助は自分の耳に届いた言葉が空耳であることを願いながら外の空気とは対照的なヒヤリとしたものを背中に感じていた。
「だから、ふぇらちぉ…っ。」
「だだだんな～～。」
教室の中でその単語を二度も言うのは危険極まりない。
佐助は幸村の口を塞いだ。
「ちょっと、そんな大きな声で言わないでよ。」
幸村は自分の口を塞いでいる佐助の手を引き剥がすと実に不服そうな顔で応えた。
まるで自分が今、どのような類の言葉を発したのか分かっていないような素振りだった。
「そんなに大きな声で言ってはおらんではないか。」
「旦那は普通でも声でかいんだから。もう、勘弁してよ。」
佐助は幸村にこれみよがしに大きなため息を一つついて見せた。
「んで、旦那はなんでそんな事知りたいの？」
まあ、大体の察しはついているのだが。
「政宗殿にして差し上げたいのだ。」
幸村はいつも政宗が自分にしてくれるばかりで自分が何もしないことに憤りを感じていた。
その幸村が悩んだ末探し出した答えがフェラチオだった。
「うん、まあ、そうなんだろうけど…。旦那、一体どこでその言葉覚えたの。」
幼い頃より佐助は幸村に変な虫や知識が着かない様、細心の注意を払って露払いをしてきたつもりだった。
(払いきれていなかった虫(政宗)が今、幸村をしっかりと蝕んでいるのだが…。)
故に、佐助は幸村には破廉恥な単語は何一つとして教えていなかった。
「辞書を引いたのだ。」
幸村は政宗に何かできることはないかと必死で辞書を開いてこの単語を探し当てた。
「辞書にかいてあったんじゃないの？」
「うむ、確かに書いてあったが、男性器を口腔や舌で愛撫することと記されておって、詳しいやり方までは書いておらなんだ。」
「そりゃそうだ。」
ポツリと溜息混じりに吐き出した佐助のセリフは幸村には届いていなかった。
「あのね、旦那、そのやり方を俺に聞くのは間違ってるって思わない？」
幸村の肩を哀れみを交えてポンと叩く。
「ナゼだ？お前は何でも知っているではないか。」
幸村の中の佐助の位置はこれだった。同い年なのに自分よりも大人びた物言いをする佐助は幸村からしたら何でも知っている者という位置づけを昔からされていた。
故に、幸村はとりあえずわからないことがあったら佐助に聞くという図式が出来上がっていた。
「いやいや、さすがの俺様もコレばっかりはわかんないよ。だってさ、したことないんだもん。」
「どういうことだ？」

「だって、フェラチオって旦那達みたいな特殊な例を除いて男はされる側なわけよ。だから、やり方って言われてもね…。」
確かに、自分達が特殊だという認識はある普通の男はフェラチオなどした事がないということか。では…。
「わかった、では、かすが殿に聞いてくる。」
「のわぁ～、まったまった、まったぁ～。」
ズンズン進もうとする幸村を佐助は教室の前の廊下で必死に止めに入った。
どう足掻いても幸村がかすがにそんなことを聞いた日には殺される。
幸村が自分でこんな単語を知るはずがない。佐助に吹き込まれたに違いない。佐助に聞いてこいと言われたに違いない。という誤変換をされるのは目に見えていた。
そうなれば、自分の命は無い。
「止めるな佐助。お前が答えてくれぬのならば他の者に聞くしかないであろう。」
「いや、そうだけどさ、そうだけどさ、かすがだけは勘弁して。」
佐助は何とか幸村を引き止める。
「大体さ、竜の旦那は、旦那にして欲しいって頼んだわけ？」
佐助の疑問に幸村は固まってしまった。
頼まれてなどいない。むしろ、政宗は幸村が何かしようとすると「いいから。」といってやんわりと止めてしまうのだ。
「頼まれてはいない…。だが…。」
「だっさたらさ、いいんじゃない。竜の旦那がして欲しくないことしてもしょうがないじゃん。」
「して、ほしくない…。」
たしかに佐助の言うとおりだ。あくまでも自分が政宗にしてあげたいだけなのだ。政宗がそれをのぞんでいたわけではない。
幸村の一人よがりなのだ。例え、そうだと分かっていても幸村は政宗に何かしてあげたい。

「はぁ…。」
佐助に諭され大きなため息を付きながら教室に帰ろうとすると大きな影に阻まれた。
「どうしたの幸ちゃん。そんな大きなため息なんてついて。いいことが抜けちゃうよ？」
同じクラスの慶次が目の前に立ちふさがっていた。
「アンタには関係ないから。」
佐助が間髪いれず慶次から引き剥がそうとする。
以前、政宗と付き合う前までの慶次の幸村に対する熱烈なアプローチを知らぬ佐助ではない。
幸村の心に必要以上の波風を立てて欲しくなかった。
「佐助、かすが殿の所には行かぬ故、教室で待っているがよい。」
佐助の気も知らず幸村は先ほどの件をまだ引きずっているようで、佐助に待機を命じた。
戦国時代ならいざしらず、佐助にそこまで幸村の命令を聞く事はないと頭では考えつつも佐助の体は自然と教室の中に戻って行った。
「ハイハイ、わかりました。気を付けて。」
「気をつけるって何さぁ～。」
幸村は佐助が教室に帰ったのを見届けると慶次にあの質問をすることにした。
「慶次殿。某、慶次殿に聞きたき事がございます。」
「ん？恋の相談？いくらでも聞くよ～。」
「恋、というわけではございませぬが。…その、フェラチオとは如何様にして行なえばいいのかご存知ですか？」
ぶふぅぅっ
慶次が思い切り噴出した。
「ゆ、幸ちゃん。なに、それ、え？ま、政宗にしてやるの？」
「はい、是非。」
「い、いやいやいやいや。ちょっと待ってよ。」